京都大学	博士（文学）	氏名	横道　誠
論文題目	グリム兄弟とその学問的後継者たちに関する研究		

（論文内容の要旨）

グリム兄弟すなわちヤーコプ・グリムとヴィルヘルム・グリムとその後継者たちの学者としての仕事について考察すること。本研究の目的をひとことで言えば、そのようになる。以上の目的を達成するために、本研究は2部構成を取っている。第1部では、おもにグリム兄弟ふたりの思想的共通点および相違点を整理し、基礎的な情報提供をおこなう。第2部ではグリム兄弟の先駆者たち、同時代人の協力者や競争相手、後続の時代の後継者をグリム兄弟の仕事に関連づけて考察しつつ、兄弟間の共通点と相違点についても改めて考察を深める。

本研究では、グリム兄弟の研究の学際性、民族主義やナチズムとの関係、多言語性、兄弟両方の仕事の特徴の強調に力点が置かれている。

グリム兄弟の研究の学際性は、決して大きな注目を集めてこなかった。フリードリヒ・シュトローの古典的な『ゲルマン文献学の小事典』は、グリム兄弟の多彩な活動に見通しを与えているが、個々の言及はあっさりしたものにすぎない（Stroh 1952, 59-138）。ガブリエーレ・ザイツ、ハンス=ゲオルク・シェーデ、シュテファン・マルトゥスそれぞれによるグリム兄弟の伝記（Seitz 1984; Schede 2009; Martus 2009）は、グリム兄弟の仕事の全体像を俯瞰しつつ、伝記の性質上、立ちいった考察は控えている。ヤーコプ・グリムの仕事に焦点を当てたウルリヒ・ヴュスの『野生の文献学』（Wyss 1979）や、グリム兄弟の初期の仕事に焦点を当てたローター・ブルームの『グリム兄弟とドイツ文献学の始まり』（Bluhm 1997）はそれぞれ精緻な研究だが、彼らは「ドイツ文献学」としての、つまりドイツ語学・文学研究としての「ゲルマニスティク」に視野を限定している。

ほかの研究者もほとんど同様だ。クラウス・ヴァイマーはヤーコプ・グリムとヴィルヘルム・グリムを文献学の学問的整備への貢献という点から観測している（Weimar 1989, 224-229, 234-240）。ヤーコプについて、「しばしば「ゲルマニスティクの父」として名が挙がる」（Hermand 1994, 32）と紹介するヨースト・ヘルマントは、現代的な意味での「ゲルマニスティク」、つまりドイツ語・ドイツ文学の学問史に焦点を当てつつも、「ゲルマニスティクにおいて、1850年代末から1960年代初頭にかけて、ドイツ語とドイツ文学に学問内在的に取りくむ傾向は強まってゆき、法律的側面や、政治的社会的側面はますます押しのけられてしまった」（Hermand 1994, 48）と注釈し、ヤーコプがその流れに飲まれなかったことを指摘している。しかし、それ以上の考察はなく、ヴィルヘルム・グリムについての目立った考察もおこなっていな

い。ヘルマン・バウジンガーやインゲボルク・ヴェーバー=ケラーマンらによる民俗学史（Bausinger 1971; Weber-Kellermann 2003）は、それぞれ優れた教科書なのだが、ヤーコプ・グリムの民俗学への貢献に叙述を制限している。

グリム兄弟の仕事を総体として理解する上で、もっとも実りある先行研究は、ルートヴィヒ・デーネケの『ヤーコプ・グリムとその弟ヴィルヘルム』（Denecke 1971）だろう。この著作は、1970 年代初頭までの研究状況をまとめた上で、グリム兄弟の仕事を総体として提示することを目的としているが、グリム兄弟に関する研究は、1985 年から 1986 年にかけて、つまりグリム兄弟ふたりの生誕 200 周年に際立って興隆し、その後は停滞期を迎えたという事情がある。2012 年から 2015 年にかけては、『子どもと家庭の昔話集』の初版の第 1 巻と第 2 巻が刊行されてから 200 周年にあたり、2012 年にカッセルで国際シンポジウムが開かれ、その内容を収録した大部かつ 2 巻本の充実した論集が刊行されたなどの成果があったものの（Brinker-von der Heide 2015）、一部で期待されたほどの盛り上がりは起こらなかった。研究が停滞しているがゆえに、本研究はデーネケの著作に収められなかった後年の研究を踏まえ、2020 年の視点からグリム兄弟の仕事に明瞭な視界を与えようとした。

ナショナリズムの創出という観点からすれば、グリム兄弟の仕事はナチズムも含めた後世の民族主義的な運動のために路線を敷いたわけだが、グリム兄弟の仕事をナチズムへの流れと近づけて考える仕事は、ドイツ文学研究ではほとんどなされていない。ウルリヒ・ヴュスは、ナチス時代に続くヤーコプ・グリムの事跡の美化に注目しつつも、ヤーコプの仕事とナチズムを接続させていない（Wyss 1979, 27-38）。ヘルマン・エングスターは、ヤーコプ・グリムの「ゲルマニア」への幻想や政治性を指摘し、ヴィルヘルム・シェーラーがグリムの事績を「まったく非政治的な所業」として解釈したことを批判的に指摘しつつも（Engster 1986, 32）、ヤーコプとナチズムと結びつけることを避けている。ハルトムート・ガオル=フェレンシルトは、シェーラーによるヤーコプ・グリムの伝記に、ドイツ統一前夜のゲルマニストによる国民意識を観察しているが（Gaul-Ferenschild 1993, 9-13）、それ以上の議論をおこなっていない。

こうした研究状況を背景として、論者がむしろ参考にしたのはドイツ民俗学史の分野だった。この分野では、一時期のドイツ民俗学がナチズムに染まったことに対する反省があらわで、バウジンガーもヴェーバー=ケラーマンらも、ドイツ民俗学がナチズムとの結婚に向かうようにして発展したこと、ナチズム崩壊後には浄化が進められたことを強調し、ナチズムへと連なる道程にグリム兄弟の仕事も位置していたという展望を示している（Bausinger 1971, 33-47; Weber-Kellermann 2003, 30-39）。日本では河野眞の『ドイツ民俗学とナチズム』が、同じ展望を持ってグリム兄弟を扱っているのだが（河野 2005）、本研究もこの展望を共有しつつ、グリム兄弟の民間伝承とナチズムの関係を、特に兄弟の後継者たちの仕事を経由することで、考察した。

グリム兄弟の多言語性は、彼らの学際性以上に注目されてこなかった。ヘルマントは「ゲルマニスティクという分野」が、「愛国的方向の産物というだけではなく、国粋主義的方向の産物」なのだと厳しく批判したが（Hermand 1994, 30）、その「国粋主義」はドイツ語とその文学への固執を必ずしも意味していない。ホルスト・ブルンナーは、ヘルマントに反撥するかのように「ゲルマニスティクは当初、観念的で政治的な綱領、国民的で愛国的だったが、国民主義的ではなかったし、ましてや国粋主義的ではなく、徹底的に世界市民的でもあった」（Brunner 2000, 13-14）と述べる。「国民主義的」でも「国粋主義的」でもなかったという主張には首肯しがたいが、「世界市民的でもあった」ことはたしかだ。というのもヤーコプ・グリムは「ドイツ語とドイツ文学のみならず、ドイツの民俗学、神話学、言語学、法制史、先史時代にも関心を抱いて」、「これらのすべての分野を、ひとつのゲルマン古代研究へと統合しようとしていた」し（Hermand 1994, 32）、ヴィルヘルム・グリムの仕事も兄のその企図を追従したのだが、彼らはドイツ語至上主義によるゲルマン狂ではなく、その仕事を多彩な言語の使用によって進めた。ライナー・ローゼンベルクは、「ヤーコプ・グリムは、ロマニステンとしておこなう法学研究から、ドイツ語とドイツ文学の学究に移行したが、それが成功したのは疑いもなく、ドイツ性のイデオロギーの影響下にあったからだった」と書く（Rosenberg 1981, 43）。だが、その「成功」は、彼の多言語を操る能力に依拠してのことだった。本研究は、グリム兄弟の著作の多言語性についても注目し、しばしば論者自身もさまざまな言語を運用して、本研究を進めている。

本研究は、グリム兄弟両方の仕事の特徴を考察する。シュトローによる前述の書物は、「ゲルマン文献学の歴史」と題する箇所の 8 割以上をグリム兄弟の事績に割いているが（Stroh 1952, 59-138）、これは「グリム兄弟」を偶像化したもので、ヤーコプ・グリムとヴィルヘルム・グリムの「学問的意義」だけでなく、「純粋に人間的な偉大さ」を明らかにすることに関心がある（Stroh 1952, 59）。これに対して、本研究はむしろ彼らの人間らしい脆弱性に関心を置いている。ローゼンベルクは、「本質的に、「ドイツ語とドイツ文学に関する学問」としてのゲルマニスティクの構築は、サヴィニーの弟子、ヤーコプ・グリムの業績だった」（Rosenberg 1981, 43）と述べ、ヴィルヘルムについては散発的にしか述べず、昔話集についての言及は完全に欠落している。『肖像画をとおしたゲルマニスティクの学問史』では、ヤーコプ・グリムが「あらゆるゲルマニストのなかで、もっとも有名な者」（Brunner 2000, 11）として検証される一方で、同書に収録された 28 人のゲルマニストたちのなかにヴィルヘルム・グリムの姿はなく、これは現代的なヴィルヘルムの位置付けと言える。デーネケの書物は、書名の『ヤーコプ・グリムとその弟ヴィルヘルム』ではヴィルヘルムの扱いが副次的に見えるが、実際にはバランスの良い叙述をおこなっているため、本研究はこの点でもデーネケを参考にしつつ、アップデートしようとしている。各種の伝

記類も、兄弟をバランスよく記述するのが通例で、本研究では大いに参考にしている。

本研究の第 1 章から第 4 章にかけては、グリム兄弟の仕事の概要を、彼らの思想的背景を踏まえながら展望する。この際、前述したデーネケの書物の記述をアップデートしつつ、かつ重複が少なくなるように工夫している。グリム兄弟の互いの心情についての注目（第 6 節、第 7 節）、ヤーコプ・グリムの学問観についての整理（第 10 節、第 11 節）は、デーネケの書物では扱われなかった事柄であるし、多くの伝記もこれらの問題に詳しく言及しない。なかでも、グリム兄弟を通常の文脈を超えた思想史的連関から考察する作業（第 4 節以下）、彼らの記述の視覚性についての考察（第 8 節、第 9 節）、言語の系統についての整理（第 15 節）で、本研究の独自性は際立っている。

第 5 章から第 8 章にかけては、グリム兄弟の昔話収集について考察する。この方面の研究は汗牛充棟と言ってよいものがあるが、兄弟間の協同を細かく考察したものについては、先行研究が限られる。村山功光の『ポエジー・自然・子ども　グリム兄弟と『子どもと家庭の昔話集』の「自然な教育」の理念』（Murayama 2005）は、グリム兄弟の文学理念の共通性と差異に注目している。これはきわめて緻密な研究だが、グリム兄弟の青年期に考察を集中させており、特に『子どもと家庭の昔話集』（いわゆる『グリム童話』）の初版出版前後を究明していることに特徴がある。本研究では、『子どもと家庭の昔話集』の第 2 版以降や、グリム兄弟の壮年期と老年期に関しても考察する。グリム兄弟が収集した昔話のうち、「灰かぶり」（いわゆる「シンデレラ」）、「ビャクシンの話」（「ねずの木の話」等とも訳される）に関する考察（第 33 節）、昔話に現れる「釘樽の刑」についての考察（第 34 節）も、グリム兄弟の互いの見解を詳しく考察したものとして、独自性が高いと言えよう。

第 9 章と第 10 章は、グリム兄弟の森に関するイメージ、ヤーコプ・グリムが編纂したスペイン語ロマンセ集、ヴィルヘルム・グリムがアイスランド語からドイツ語に翻訳した「エッダの歌」を考察する。第 11 章はヤーコプ・グリムの神話学に集中するものの、第 12 章はグリム兄弟が昔話「茨姫」の解釈について、いわゆる共同戦線を張っていたことを論じる。第 9 章に関しては、いずれの議論も先行研究が豊富と言えない。特に、グリム兄弟の森に関するイメージについては、本格的な研究は日本でまだ出版されていないし、スペイン語ロマンセ集に関する研究は、スペイン語に関する考察が必要という理由からドイツでも研究がない。第 11 章の「エッダの歌」に関する研究はアイスランド語に関する考察が必要という理由から、ドイツでも先行研究は限定されていたが、2014 年に刊行されたクリストフ・ザイトラーによる『グリム兄弟のエッダ計画』が状況を変えたため、本研究ではザイトラーが携わらなかった研究に力が注がれている。

第 11 章は河野眞の各種の著作を、第 12 章は野口芳子の論文「グリムの「いばら姫」の異型をめぐって　グリム、ペロー、バジレにおける比較」（『グリムのメルヒェン　その夢と現実』所収）を、本研究の出発点として利用し、それぞれの研究を大きく乗りこえることを目的とした。日本や中国にも視野を広げることで、むしろドイツ語圏では不可能に近い議論が構築されている。

第 1 部のきわだった新奇性としては、カント、ヘルダー、グリム兄弟を連続的に論じる（第 21 節）、通常は伝承研究で論じられる内容をグリム研究（ドイツ文学研究、思想史研究）と統合する（第 35 節、第 36 節、第 37 節、第 36 節）、新しい論点として近年浮上した LGBTQ＋に関する考察を織りこむ（第 31 節）試みがある。第 1 部は従来のグリム研究を踏襲した記述が多いが、第 2 部での跳躍のために不可避の議論を形成している。他方、第 2 部に関してはその新奇性は際立っている。グリム兄弟の森についての見解の同時代人との比較（第 39 節）、ヤーコプ・グリムのスペイン語ロマンセ集の後継者による受容（第 41 節）、グリム兄弟およびヘルマン・グリム（ヴィルヘルム・グリムの息子）についてのエルンスト・ローベルト・クルツィウスの言及（第 42 節）、ヴィルヘルム・グリムの散文訳の分析、ヴィルヘルム以後の「エッダの歌」の翻訳（第 48 節）、ヴィルヘルム・マンハルトのドイツ語とそのジェイムズ・ジョージ・フレイザーによる英訳の比較（第 52）説、「マンハルト型の学説」に日本での影響力（第 55 節）、ヴィルヘルム・グリムの学術的文体の分析（第 62 節）、中国と日本の「眠り姫」（第 68 節、第 70 節）、「眠り姫」の系統図の推測（第 69 節）などに関しては、独創性が高いと言える。

（論文審査の結果の要旨）

ヤーコプとヴィルヘルムのグリム兄弟は、一般にメルヘン集『グリム童話』（本来のタイトルは『子どもと家庭のメルヘン集』）の編纂者として名を知られているが、二人の学者としての活動はきわめて幅広い。19世紀の前半、いまだ「ドイツ」という国民国家が存在していない時点にあって、兄弟は「ドイツ民族」、すなわちドイツ語を話す人々の民族的ルーツに関心を寄せ、その関心はドイツ語学やドイツ神話学という形で結実した。彼らのメルヘン収集活動は、あくまで、素朴な民衆が代々口伝えに伝えてきた物語（＝メルヘン）の中に、ドイツ民族の文化の精神的ルーツを探るという趣旨で行われていた学術的な活動だった。グリム兄弟の仕事は大きな反響を呼び、彼らはやがて、「ゲルマニスティク（ドイツ語学ドイツ文学）」という研究ジャンル自体を確立した功労者と目されるようになる。兄弟の仕事をいわばコピーする形で、世界各地で民俗学が生まれた。本論文は、この兄弟の学術的な仕事の全体像を捉えようという意欲的な取り組みである。

ただし、グリム兄弟の仕事の評価には、一定の困難がつきまとう。彼らの民俗学上の業績は、後世において毀誉褒貶にさらされることになったからである。兄弟はメルヘン集を世に出すにあたり、自分たちがメルヘンを聴き取ったのは「素朴な農家のおばあさん」であって、彼女たちの語りの中にはドイツ土着の古い物語の精髄が純粋に口承で（つまり文字を経由せずに）、長い時間を経てもほとんど形を変えずに脈々と受け継がれていると主張していたが、実際には、兄弟がメルヘンを聴き取ったのは、多くが市民階級の若い女性であり、教養があって読み書きができ、しかもユグノー系、つまりフランスからの移民の子孫だったのである。この発見は、民俗学とは一つの土地固有の土着の伝承を研究するものだという、グリム兄弟に端を発する考え方を揺るがすポテンシャルを持っていたため、その後の研究においては、グリム兄弟の仕事を「捏造」や「嘘」として断罪するものと、いわば護教論的に旧来の民俗学のイメージを守ろうとするもの、両極の議論が生まれた。こうした研究状況に対して、本論文は、どちらの極に落ち込むことも巧みに回避しながら、グリム兄弟の学術的な立場がいかに形成され、その学術性が後世においてはどのように批判・修正を受けていったのかを、個々のトピックに即して冷静に取り出している。

本論文の第8章「太古に結ばれた昔話」は、メルヘンなどの民間伝承は古代の神話が形を変えたものであるという、（現在では疑問視されているが）強い影響力を誇ったグリム兄弟のテーゼが何を根拠として生まれ、そこにどのような問題があり、これに対してボルテとポリーフカ、アールネをはじめとするフィンランド学派などの後世の学者たちがどのような修正を加えたかをたどることで、論文全体の範例とも言うべき視点を打ち出している、白眉の章である。重要なのは、最初にグリム兄弟が提示した「神話→民間伝承」という図式が、個々のケースにおいては実証性を否定されながらも、後世の学者たちにインスピレーションを与え、実証的な研究ジャンルを生み出す

ことに寄与してきたという逆説的な事態である（あえて卑俗な言い方をすれば、「嘘から出た実」ということになるだろう）。それは今日、コンピューターによる大規模なデータ処理を駆使した神話の系譜学のような営みにも結実している。

本論文のさらなるメリットは、従来、ともすれば「ゲルマニスティク（ドイツ語学ドイツ文学）」の狭い枠内に閉じ込められて見られがちであったグリム兄弟の学術的な仕事を、学際的・国際的な文脈に開いてみせた点にある。第9章「ゲルマンとロマンスの相克」は、ヤーコプ・グリムが取り組んだ古スペイン語の民間伝承の研究を、同時代のドイツにおける「ロマニスティク（ラテン系の言語・文学の研究）」の文脈中に位置づける。第10章「『歌謡エッダ』の企画」は、グリム兄弟が取り組んだ古代アイスランド語の神話伝承のドイツ語翻訳という仕事に、伝記的な側面と詳細なテクスト分析の両面からアプローチする。後世の翻訳者たちの訳との比較も行われており、それ自体として学術的価値の高い章である。第11章「マンハルト型の学説」は、再びグリム神話学と後世の学者たちの学説の関係を取り上げ、現代の習俗や民間伝承に古の神話の痕跡を見出すという発想が、ドイツの神話学者ヴィルヘルム・マンハルトを経由して、『金枝篇』で知られるイギリスの人類学者ジェイムズ・フレイザーに受け継がれ、後にその妥当性を否定されながらも、今日に至るまで文学的想像力の肥料となりつづけているという事態に目が向けられる。

第12章「眠り姫」は、それまでの章とは趣が異なり、著者自らが、「眠り姫/茨姫」のモチーフを手がかりに、民俗学の実践を企てたものである。イタリアのバジーレ、フランスのペローを経由してグリムのメルヘン集に入ってきたこの物語類型は、そこから世界に広まり、日本や中国などアジア圏でも多様に受容されている。

以上のように、本論文は、グリム兄弟の学術的な仕事を歴史的な文脈中に位置づけ、その射程を明らかにした研究成果として、高く評価することができる。むろん、本論文にも欠点がないわけではない。第1章から第6章までは、論文の構成上必要だったとはいえ、概説的な記述に流れがちである。また、ジェンダー論的な問題を扱った第7章は、これまでグリム童話（やその派生作品）に対して寄せられたジェンダー論的な観点からの批判の要点を受け止めたうえで新しい論点を提示できているとは思いがたい。著者は現在、当事者研究の実践者としても脚光を浴びているが、そこで得られた知見・方法をグリム研究に還元することにより、さらなる研究成果が期待される。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2022年1月26日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。